

アッカド・アラム両言語による 書簡の比較研究

守屋 彰 夫

1、書簡通史と現在の研究状況⁽¹⁾

本稿の課題は、アケメネス朝ペルシア時代に当時の通用語、所謂 *lingua franca* であった帝国アラム語で書かれた書簡の語法、形式の淵源を探ろうとするものである。このアラム語書簡はその性格上、公的書簡と私的書簡に大別できるが、殊に後者についてはそれぞれの書簡の語法、形式の諸特徴が、それらの大部分が書かれたエジプト文化の影響下に立つのか、それとも、前時代の政治的軍事的支配階級であったアッシリア、バビロニア文化の影響下に立つのか、どちらから最も多くの影響を蒙ったかを検討することが具体的に課せられた問題である。

当面の課題はしたがって紀元前6-5世紀のアラム語書簡の問題であるが、ここに至るまでにメソポタミアを中心にしたオリエント（現在のイランからエジプトまで）は書記法に限定しても文化的には三千年近い前史がある。その書記法を中心にした文化史を概観すると、われわれの課題がより鮮明に浮かび上がるであろう。絵文字や印の刻印から始まった書記法は、メソポタミアでは粘土板文書の使用によって日常化されたが、現在までに発見された記録によれば紀元前3100-3000年頃にまで遡る。これらは、専ら行政文書であり、神殿や宮廷の日常業務の記録が主な目的であった。遠隔地とのコミュニケーションにこの技術が適用されるにはなおしばらくの時間を要した。最も古い書簡は、紀元前2350年頃に初めて現われる⁽²⁾。つまり、発見された文書で見ると、書記法が確立されてから最初の書簡が出現するまでに、実に700年前後かかったことになる。書記法と言う媒体によって、空間によって隔てられた人間が時間差を伴うとは言え、ともかくコミュニケーションが可能になるまでにこれ程の時間が必要だったとは、われわれには多少不思議な感じがする⁽³⁾。しかし書簡というものが古代人の目には摩訶不思議に映ったことを伝える伝説が残されている。[エンメルカルとアラッタの首長]⁽⁴⁾と言うスメル語の詩文による長い物語によれば、両支配者の知恵争いの最終段階で、エンメルカル王は粘土板文書にメッセージを書き付けるという形の書簡を「発明」する。この物語によれば、歴史的展開とは異なり、書簡の発明が直接的に書記法の発明と結び付けられている。同時にこの物語からは、書記法が書簡に応用される以前は、使用者の記憶力に頼った口頭による遠隔地間コミュニケーションが行わ

れていたことが判る。エンメルカルはアラッタの首長に対する最初からの要求すべてを粘土板文書に書き付けて、その粘土板文書を使者に持たせてアラッタの首長の下へ遣わした。粘土板書簡のお陰で使者は長い長いメッセージを見事に復誦することが出来た。使者から粘土板文書を示されたアラッタの首長は、楔形文字が記された粘土板を矮つ眇めつ眺めるばかりであったと言う。エンメルカル王は紀元前三千年紀のウルクの伝説上の王であり、アラッタの首長は実在の人物かどうかはともかくイラン高原の祭司王である。この物語の背後にはメソポタミアとイランとの間で、アジアへ抜ける通商権をめぐる活発な外交取り引きが展開され、頻繁な商人の往来があったことが前提されている。又、インターネットやファクシミリのない時代に、時間差なしに書簡が迅速に届けられる夢や願望が「ルーガルバンダと雷神鳥⁽⁵⁾」という一種のおとぎ話の中で、実現されている。

もう一つ別の物語では、アッカドのサルゴン（紀元前三千年紀後半）がかつて王の献酌官であった時、王から嫌疑をかけられた末、粘土板の持参人を殺すよう認められた書簡を持ってウルクへ派遣された物語が残されている⁽⁶⁾。サルゴンは恐らく粘土板の封筒を壊して内容を知り、難を逃れたらしい⁽⁷⁾。この記事は旧約聖書サムエル記下11章のダビデの武将ウリヤに託された書簡（15節）や、シェイクスピアの悲劇『ハムレット』の中で、ハムレット自身がデンマーク王クローディアスからイギリス王へと持参するよう依頼された書簡を彷彿させる。ウリヤはダビデ王の書簡内容を知ることなく、軍人として悲劇的な戦死を遂げる⁽⁸⁾。一方ハムレットは、知謀をめぐるして書簡の中味をすり替え、王を出し抜く。これらの事例から古来、書簡には特有の危険が伴うことが暗示されている。つまり、書簡というものは、発信人から名宛人に到着するまでに、紛失、盗難、改竄などが起こり得ることである。ずっと時代が下るが、新アッシリア時代、難解な楔形文字によるアッカド語に代わって、容易に習得可能なアルファベットによるアラム語が普及し始めた頃、王宛の書簡には、旧来のアッカド語のみの使用を強要したサルゴン二世（紀元前8世紀末）は、秘密の漏洩を恐れていた⁽⁹⁾のである。

さて、初期王朝時代末期（前2350-2300年）からは、少なくとも6通のスメル語の書簡が見つかっている。次のサルゴン王朝時代（前約2300-2100年）には、書簡はスメル語とアッカド語で書かれている。ウル第三王朝時代（前約2100-2000年）はスメル語復興時代と言われるように、書簡を含め公式文書の大多数はスメル語で書かれた。古バビロニア時代（前約2000-1600年）には、日常的にはほとんど全てアッカド語で書簡は書かれるようになり、数千の書簡が出土している。従ってスメル語は生きた言語としての実際上の使用は止んだが、書記の養成学校では実際に取り交わされたスメル語書簡がずっと教材として使用され、その書簡形式が標準化され、長く踏襲されることになった⁽¹⁰⁾。又、ウル第三王朝時代以降、上記の書簡とは、形式、内容ともに異なる主として神に捧げられた祈願文書簡がスメル語

韻文で書かれた。この個人による祈願文書簡の伝統は、以降のアッカド語時代にも引き継がれ、紀元前7世紀まで綿々と続いた。古代イスラエルでもダビデ王の祈り(詩編56-60篇)やヒゼキヤ王に帰せられている詩文(イザヤ書38章9節以下)にその直接、間接の影響を見ることができよう。⁽¹¹⁾

スメル語書簡の伝統と共に、アッカド語書簡の伝統も徐々に確立された。中でも新アッシリア王朝の首都ニネヴェからは、3,500通ほどの書簡、ないし書簡断片が出土し約1,500通だけが現在までに公刊されている。それらのほとんど(95%以上)がアッシリア王宛か、王からの書簡である。全体の公刊は将来の課題として残されたままだが、分野を限定して研究が着実に進行している。カルフ(現ニムルド)からの書簡も130余通が公刊されている。時代としては、均一に分布している訳ではないが、紀元前9世紀半ばからアッシリア帝国の崩壊直前までのほぼ250年間に亘っている。均一な分布どころかサルゴン二世を継いだセナケリブ以降、極端に出土数が少ない一つの理由は、パピルスや羊皮紙を使用するアラム語が普及し、粘土板に楔形文字を刻むアッカド語に取って替わったことにあるだろう。このことは、アラム語が優勢なユーフラテス川西方からの書簡が目立って少ないことも傍証となろう。パピルスや羊皮紙はオリエントの自然環境では、既に朽ち果て消滅してしまっただろう。但しエサルハドンやアッシュルバニパル時代(紀元前7世紀)にもアッシリアやバビロニアの都市部で粘土板文書が継続して使用されたのは、王侯貴族、官僚、学者が特権意識に基づいてアッカド語に固執したせいと考えられよう。スメル語の書簡が書記の養成学校で繰り返し学ばれたように、アッカド語の書簡も教材として書記の養成に使用された。どの書簡も様式化が進み、形式が整えられている。⁽¹²⁾

このようにスメル、アッカド語がオリエントの文化の担い手として支配的地位を保っている中から、アラム語が日常語としても、行政上、外交上の言葉としても、アッシリア、バビロニア帝国の中に浸透し、次第に古い言語に取って替わるという事態が出来た。アッシリア時代のレリーフには、粘土板とパピルスないし羊皮紙にそれぞれ記録を執る二人の書記像が頻繁に現われる。⁽¹³⁾旧約聖書では、センナケリブが紀元前701年にエルサレムに侵攻した際、ユダのヒゼキヤ王の官吏が、交渉内容が民衆に判らないようにアラム語の使用をアッシリアの使者に要求している場面の記述が残されている(列王記下18章26節)。外交上の言語としてアラム語がこの地域で定着していた証左と言えよう。このアラム語は習得の容易なアルファベットによる書記法が特徴であり、次のペルシア時代には帝国西半分、殊にエジプトを含んだユーフラテス川西方地方の公用語となった。これを帝国アラム語と言う。

今世紀初頭よりエジプトのナイル川上流域にあるエレファンティン島でこの帝国アラム語で記された数多くの文書が発見された。メソポタミアとは異なる乾燥したエジプトの自

然環境の中では、パピルスや羊皮紙は、二千年以上の長きに亘って消滅を免れた。その中にはペルシア政府の高官による書簡も含まれていた。その後もエジプト各地でパピルスに書かれた書簡の発見が相次いだ。これらの書簡を公用と私用に分類して各々の言語学的特徴や書簡様式の研究が盛んになった。公用書簡にはその性格上、ペルシア語やアッカド語の影響のみならず、メソポタミアの書簡様式の影響が色濃く見られるのは自然の結果であった。筆者が学位論文に取りかかった1980年代後半までには、既に公用書簡の詳細な研究がなされていたが、私的書簡については、英語圏ではまだまとまった研究は行われていなかった。そこで筆者はエジプトで発見された帝国アラム語で書かれた私的書簡を集め、それらの言語学的、書簡様式に関する研究を志し、一応の結果をまとめることができた⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾。しかし、今の時点でその成果について振り返ってみると、私的書簡には、メソポタミアの様々な影響よりもむしろ、エジプト語やエジプトの書簡様式の影響が強くみられると考えられていた当時の一般的な見解に依ったため、メソポタミアの書簡様式の影響を過小評価したのではないかと言う疑問が浮かび上がってきた。最近になってエジプトのアラム語私的書簡に、どの程度メソポタミアの書簡様式の影響が見られるかを問うべきだと主張がイタリアの Fales によってなされている⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾。

そもそもアッカド語とアラム語とは、アッシリア、バビロニア両帝国時代に数百年に亘って共存ないし競合していた歴史がある。その間、両言語は相互に影響しあっていた⁽¹⁸⁾。又、言語のみならず、書簡の様式に関しても、影響し合ったであろうが、この場合には特に、政治的にも文化的にも支配的な地位を占めていたアッカド語からアラム語への影響が圧倒的であったと推定できよう。このことは、エレファンティンで発見されたアラム語の公用書簡の言語上、様式上の特徴を列挙して見ると、極めて明らかである。しかし、そうだとすると、エジプトで発見されたアラム語の私的書簡の様式上の特徴は、一体どこに由来するのだろうか。筆者はここ数年、先に言及した Fales の主張にそっての見直しに携わってきた。具体的には、アッカド語書簡とエジプトのアラム語私的書簡に見い出される書簡冒頭の宛名書き、冒頭のいわゆる神殿挨拶、第三者への挨拶などを、その語法、その機能や様式から比較する作業である⁽¹⁹⁾。

以下では古代オリエントで最初の書簡様式の伝統を築いたスメル語書簡、それを継承したアッカド語書簡のそれぞれの特徴を概観した後、アラム語書簡との比較に移ることにする。

2、スメル語、アッカド語書簡の伝統と特徴

メソポタミアで最も古い書簡（CIRPL 46, 前2350年頃⁽²⁰⁾）は宛名書きで始まっているが、その冒頭部分を例にとると、

1. lú-en-na
2. sanga ^anin-mar^{ki}-ka-ke₄
3. na-e-a
4. [e]n-e-tar-zi
5. [sanga] ^anin-[gír]-su-ra
6. [du₁₁]-ga-na

1-3行が発信人、4-6行が受信人で「ニンマル（女神）寺院管長ルエンナが斯く述べる、ニンギルス（神）寺院管長エネタルジに語れ」となっている。7行目から書簡本文に移行するが、そこでは発信人ルエンナは三人称で言及される。宛名書きの位置は書簡の終りに来る場合もある。

次にアッカドのサルゴン時代に移ると、多少の用語の変化が見られる。動詞 e に挿入辞-bが付加されて na-bé-a となる。もう一方の命令形動詞 du₁₁-ga(-na)が ù-(na-)dug₄ に取って替わられる。後者はアッカド語の qibī(-ma)に対応し、実質的に命令形としての機能を果たしている。この2例を提示する。

1. [...]
2. [ù-na-dug₄]
3. puzur₄-^d[ma-ma]
4. [én]si la[gaš^{ki}-ke₄]
5. na-bé-a

1. ur-gidri
2. na-bé-a
3. ur-^anin-ma[^r^{ki}]
4. ù-na-dug₄

前者 (RTC83) は受信人の名前が欠損しているが、1-2行が受信人、3-5行が発信人で「誰某に語れ、ラガシ知事プズルママが斯く述べる」となり、後者 (ITT 2/1 4523) は1-2行が発信人、3-4行が受信人で「ウルギドリが斯く述べる、ウルニンマルに語れ」となっている。この二通の書簡では、受信人と発信人の順番が入れ替わっている。それぞれ次に続く書簡本文では、三人称の報告的文章となっている。しかし、書簡本文に発信人の

「私」、受信人の「あなた」を示す人称が現われる書簡があり(前者は ITT 1 1261, ITT 2/2 5758, STTI 11; 後者は Yang, Adab A 868などに見られる)、これらの場合には発信人の発言がそのまま使者によって代読されることを意味すると理解出来よう。又、書簡によっては発信人、受信人様式の両方が現われることなく、片方だけのものも多数存在する。

これらの例から、手紙の宛名書きの古い様式は、口述と朗読の慣習を反映していることが判明する。最初期の宛名書き様式は「語れ」という二人称の命令形を含み、この命令形は宛名書き様式が数世紀間の発展をみる中でも保持される。この事実から、書簡の作成は次のように想定される。依頼人ないし主人の口述を書記が粘土板に書き、使者(配達人)がその書簡を目的地へ運び、その使者自身か受信人の部下が受信人に朗読する。このような手続き以外にも、書記を使わず発信人が直接自分で書く場合や、受信人が直接自分で読む場合の可能性も排除できないだろう⁽²¹⁾。但し、初期メソポタミアの書簡の大部分は官僚機構の中で交信されたものなので、個人的な伝言が書簡の中に挿入されることはあっても、後期メソポタミアの書簡に見い出される私的書簡は存在しない。

さてこのアッカドのサルゴン時代は、スメル語と並んでアッカド語が公用書簡に出現する時代であった。その宛名書き様式はこれまで見てきたスメル語の書簡様式と対応する方向に次第に向かう。次の2例(順に RTC 78, Yang, Adab A 748)には *ù-na-dug*₄ に対応する動詞が欠けている。

1. *en-ma*
2. sa-aṭ-pi-DINGIR
3. *a-na* É.GUD

1. *a-na* ÉNSI
2. *en-ma*
3. wu-túr-be-lí

最初の例では1-2行が発信人、3行目が受信人で「斯くシャプティイルム(は言う)、É.GUDへ」となる。二番目では、1行目が受信人、2-3行が発信人で「市長へ、斯くウトゥルベリ(は言う)」となる。しかし次の例(HSS 105)では動詞 *qabû* の命令形が使用されることによりスメル語書簡様式が逐語的に踏襲されていることが判る⁽²²⁾。

1. *en-ma* da-da
2. *a-na* ì-lí

3. *qī-bī-ma*

訳は「斯くダダ (は言う)、イリに語れ」となる。この宛名書き様式に続く書簡本文には先に見たのと同じように、一人称、二人称の文章が現われる例が多数見い出される。

次にスメル語復興期と言われるウル第三王朝期（前2100-2000年頃）の書簡例を見よう。この時代の書簡に使用されている宛名書き様式は、前時代の様式を踏襲しており、実質的にはその後の新アッシリア、新バビロニア時代までも変化なく続いた。発信人、受信人が共に現われる例を見よう（TCS 11）。

1. *lugal-e*
2. *na-ab-bé-a*
3. *ur-^dli₉-si₄-na-ra*
4. *ù-na-a-dug₄*

1-2行が発信人、3-4行が受信人で「斯く王は言う、ウルリシナに語れ」となる。この変化形として、宛名書き様式が書簡の終りに来るもの、アッカド語の照応形 *umma S(-ma) ana A qibī-ma* (Sは発信人名、Aは受信人名で「斯く S、Aに語れ」) が使用される場合、発信人、受信人の順序が逆の場合、発信人部分が書簡冒頭に来て、受信人部分が書簡末に来る場合がある。短い宛名書き様式としてはどちらかの要素しかないものがあり、こちらの方が圧倒的多数を占める。⁽²³⁾

次に続く時代のイシン第一王朝時代の書簡例としてテル・アスマル書簡（古代の都市エシュヌナ出土）を見る。紀元前2000年より少し前（ウル第三王朝の終り）から紀元前1900年より少し後までの100年余の時代のアッカド語書簡（初期古バビロニア語）で大部分は破損しているか断片的である。1,400以上の書板のうち、59の書板が書簡と同定され、その内の55の書板が出版された。⁽²⁴⁾ これらの書簡は宮廷址の数箇所で見られ、大部分がエシュヌナの支配者宛である。書簡の年代順は主としてこれらの人物が職位にあった順番により決定できる。⁽²⁵⁾ 手紙の発信人と受信人の宛名書き様式は三種類が確認される。

標準： <i>a-na A</i>	逆順： <i>um-ma S-ma</i>	短縮： <i>a-na A</i>
<i>qī-bī-ma</i>	<i>a-na A</i>	<i>qī-bī-ma</i>
<i>um-ma S-ma</i>	<i>qī-bī-ma</i>	

標準形式は数百という単位で古バビロニア書簡に見い出される。古アッシリア（カッパドキア）書簡では高位にある者が先に低位の者が後にくるように逆順形式と標準形式が併用されている。しかしながらテル・アスマル書簡では発信人と受信人の相対的地位を確定することは困難である。ウル第三王朝期と初期イシン・ラルサ期の書簡と同様に、短縮形式 *a-na A qī-bī-ma* が初期テル・アスマル書簡で多用されている。短縮形式の書簡は封筒に発信人の名が記されていたか、配達人によって発信人の名前が受信人に告げられたと考えられる。逆順形式の書簡は少数、標準形式が最も多い。後期古バビロニア書簡を特色づける挨拶様式は#31を除いて全く見られない。全体としてテル・アスマル書簡は、内容とその起源が多種多様で、共通のスタイルを見出すのは困難である。さて#31は例外的に挨拶様式を含んでいるので、以下に宛名書き様式と挨拶様式部分のテキストを掲げ、特徴を見ておこう。

No.31 1930-T220

1. *a-na* ^dUr-Nin-mar^{KI}
2. *qī-bī-ma*
3. *um-ma A-mur-i-lu-sū-ma EN ša* ^dEN.ZU
4. ^dEN.ZU *ù* ^dNin-gal
5. *li-ra-ma-kà*
6. ^dTišpak *ù* *Û-gul-lá*
7. *u₄-mi ma-du-tim*
8. *ar-kà-tim ša-na-tim*
9. *li-be-lu-kà*
10. *iš-da ku-si-kà*
11. *lu ki-na*

〔¹⁻²ウルニンマルに語れ、³斯く（神）シンのエン祭司アムルイルッス（は言う）。⁴⁻⁵（神）シンと（女神）ニンガルが君を愛するように、⁶⁻⁹（神）ティシパクと（神）ウグラが君に多くの日々と多くの年月を支配させ給うように、¹⁰⁻¹¹君の王位の基盤が堅固であるように。〕

裏面の12-20行が書簡本文になっているが、挨拶様式が二人称を使用していたように一人称と二人称の文章で発信人アムルイルッスが語った言葉そのものの引用となっている。又、本文末尾（18-20行）も発信人アムルイルッスのウルニンマルのための（神）シンと（神）ニンガルに対する祈りで結ばれている。

18. IGI ^dEN.ZU

19. *ù* ^d*Nin-gal*

20. *lu-uk-ru-ub-kum*

「(神)シンと(女神)ニンガルの前に汝が祝福されますように。」

このような挨拶や祈願様式は後代になって著しい発展を遂げるが、その萌芽をここに認めることができよう。

次にずっと時代は下るが前14世紀の国際関係を反映するアマルナ書簡(約350通)を概観しよう。その言語はバビロニア語を基本とするが、極めて地方色が強いこと、書記の母国語の影響を蒙っていること、バビロニア本国では廃れてしまった時代遅れの表現や表記法が依然として残っていること、同時代であれ古い時代であれ通常**の**バビロニア語の文章表現には見い出されない周縁的言語の特徴を有すること、新旧の言語の混淆、などの特色がある。⁽²⁶⁾

国家と国家の王たちとの間で交された書簡の冒頭の宛名書き様式は、この書簡を読む書記に宛られたもので、古バビロニア時代から踏襲された様式 (*a-na A qī-bī-ma um-ma S-ma*) に従っている。古バビロニア時代でもアマルナ書簡においても、発信人と受信人との社会的身分の高下を示すものではない。しかしながら、*um-ma S a-na A qī-bī-ma* が現われれる三例 (EA 5,31, 41) では、発信人が受信人より高位か同等であり、この体系の中では、最初の様式 *a-na A qī-bī-ma um-ma S-ma* は高位の者から下位の者への書簡となる。宛名書きに続いて最初に発信人が健在である報告 *a-na ia-ši šul-mu* 「私に関しては順調である。」が来るが、これは省略可能であり、この要素のない書簡も存在する。しかしながら、相手の安否を問う *a-na ka-a-ša lu-ú šul-mu* 「あなたが平安でありますように。」は省く事は出来ない要素であり、受信人のみならず、受信人の家族から馬や戦車にまで長々と挨拶が及ぶ場合もある。

エジプトのファラオからその臣下に宛られた書簡の宛名書きは、*a-na A qī-bī-ma um-ma S-ma* の様式を採用しており、必ず臣下が先に来る。その宛名書きの後に *a-nu-um-ma tuppa^{pa} an-na-a ta-ba ub^e-la-ku ga-bi-e a-na ka-a-ša* (EA 99,367,369-70) 「ここに彼(私?)はこの良き書板を汝に送り、汝に言う。」というエジプト起源の本文導入様式が続く。逆に下位の者からエジプト人の高位の者への書簡では *a-na A be-lī-a ki-bī-ma um-ma S ardu-ka-ma* の様式が使われる。又、平伏様式という王への忠誠、臣従を表現する様式 *a-na šēpe bēlī-ia^{iu} šamši-ia 7-šu ù 7-ta-an am-ku-ut* 「我が主、我が太陽の足元に私は七度、七回平

伏します。」が宛名書きに続く。単に高位の者への場合には「七度、七回」が無い短い様式となる。王からの書簡の受領を「私は王の書板の言葉を聴きました。」と表現する例がある (EA 141, 192, 196, 213, 216-18, 220f., 243, 246, 253f., 269, 293, 303-5, 364; 301f., 321, 328f. も参照。) が、これは書簡が朗唱されたことと関係があるだろう。

以下ではアッシリア時代を代表するサルゴン二世時代 (前722-705年) の書簡を考察しよう。1850年から1905年までにニネヴェ宮殿域 (現在の Kouyunjik) で行われた発掘により、6,000程の楔形文字による記録庫文書が発見され、そのうち約半数が書簡であることが判明した。さらにそれらは大きく二つのグループに分けられるが、Parpola が出版したのは北宮殿からのもので紀元前716-704年の間に王とその家臣との間に交された書簡群である。⁽²⁷⁾ サルゴン二世の書簡群には約1,300の書簡が数えられる。新アッシリア帝国は「情報交換の帝国」 (M. Liverani) と呼ばれるように、広大で多民族からなる帝国を維持するために、中央政府と各地方との行政上の往復文書が極めて重要な役割を果たした。その配達機構も整備され、情報の遺漏がないよう細心の注意が払われていた。古くからの商業路や地方道に加えて、「王の道」 (*hāl šarri*) と呼ばれる幹線道路が帝国を縦横に張り巡らされ、30km 毎に駅 (*bēt mardētu*) が配置されていた。行政文書の配達人は書簡の中で *mār šipri* として言及されている。⁽²⁸⁾ アッシリアの行政文書は *egirtu* と呼ばれる粘土板に書かれた後、粘土の封筒に入れられ、発信者の印章が押された。アッシリアは支配者のアッシリア語と被支配者のアラム語の二言語併用社会であったが、少なくとも前8世紀末まではアッシリアの行政文書はアッシリア語で書かれた。先に言及したようにサルゴン二世は臣下からの公式文書はアラム語ではなく、アッシリア語で書くよう要求を出している (CT 54 10)。サルゴン二世の死後間もなくアラム語の使用禁止に歯止めが繋がらず、公式文書でもアラム語が使用されるようになった。

さて手紙本文の書き出しに見られる手紙の発信人と受信人の宛名書き様式を提示すると、王からの手紙は

a-bat LUGAL a-na A

「王の言葉、誰某へ」というように、*abutu*「言葉」で導入される。これに時に *šul-mu ia-a-ši šul-mu a-na KUR-aš-šur. KI SĀ-ka lu DÛG.GA-ka* 「私は健やかである。アッシリアは平穏である。汝の心を喜ばせよ。」 (ND 2759) という挨拶が続く場合もあるが、挨拶なしでいきなり本題に入ることもある。

王への手紙（次例は K 5464+K 12951+K 14628, ll.1-7）は

a-na LUGAL be-lī-ia
 ARAD-ka A
lu DI-mu a-na LUGAL be-lī-ia
 DI-mu a-na KUR-aš-šur .KI
 DI-mu a-na É.KUR.MEŠ-te
 DI-mu a-na URU.bi-rat ša LUGAL gabbu
 ŠĀ-bu ša LUGAL EN-ia a-dan-niš lu-u DÛG.GA

「我が主、王へ、汝の下僕 誰某。我が主、王が安穩でありますように。アッシリアは平穩である。諸神殿は平穩である。全ての王の城砦は平穩である。我が主、王の心を大いに喜ばせよ。」に見られるように、定式化された挨拶が続く。当然のことながら臣下はこの挨拶の省略は許されない。王の安穩を願うだけの短い挨拶が多いが、王の挨拶に対応する長い答礼が続く場合もある。上記の挨拶の要素の一部が書簡末尾に来る場合もある。更にまた王の健康を願ったあとに、神々へ王の祝福祈願が付加される場合もある。

aš-šur 𐎒NIN.LÍL a-na LUGAL
 EN-ia lik-ru-bu

「(神)アッシュウルと(女神)ムルリッスが我が主、王を祝福されますように。」に見られるように、アッシリアの国家神とその配偶神への祝福祈願となっている。この様式の外に、バビロニアの最高神マルドゥクとその息子ナブウ神への祝福祈願も存在する。

lu-ú šul-mu a-na MAN EN-iā
 𐎒PA 𐎒MES a-na MAN EN-iā lik-ru-bu
 DINGIR.MEŠ a-ši-bu-te URU.BĀD-MAN-GIN
 UD.MEŠ GÍD.DA.MEŠ a-na MAN EN-iā lid-di-nu

「(神)ナブウ(と) (神)マルドゥクが我が主、王を祝福されますように。ドゥルシャルキンに住まわれる神々が我が主、王に長命を賜わりますように。」

この形式には多少の言葉遣いの異なる形式も存在し、(神)マルドゥクが別の呼称(神)ベル

で言及される場合、同一の書簡内で(神)マルドゥクと(神)ベルの両方が使用される場合もある。又、神々への祝福祈願が書簡の末尾に来る場合もある。次にもっと多くの神々への祝福祈願が言明される場合 (K 1062) を見よう。

a-na LUGAL be-lí-ia a-dan-niš
a-dan-niš lu-u šul-mu
aš-šur ʹUTU ʹ+EN ʹPA ʹ30 ʹU.GUR
a-na LUGAL be-lí-ia lik-ru-bu
ARAD-ka ʹhu-un-ni-i
ka-ri-ib LUGAL be-lí-šú
šul-mu a-na É.KUR-ra-a-te
a-na É.GAL.MEŠ ša KUR-aš-šur gab-bu
šul-mu a-na ʹ30-PAB.MEŠ-SU
DUMU-LUGAL GAL-e šul-mu a-na DUMU.MEŠ MAN
gab-bu am-mar ina KUR-aš-šur šu-nu-ni
ŠÀ-bu ša LUGAL be-lí-ia
a-dan-niš lu-u ta-a-ba

「我が主、王に至高至善なる平安を。(神)アッシュウル、(神)シャマシ、(神)ベル、(神)ナブゥ、(神)シン、(神)ネリガルが我が主、王を祝福されますように。主なる王の崇拜者、汝の僕フニニ(より)。アッシリアの全ての諸神殿と王宮は平穏である。御継嗣セナケリブは平安である。アッシリアの全ての皇太子は平安である。我が主、王の心を大いに喜ばせよ。」

この書簡冒頭部分は、受信人としての王への祝福、神々への祝福祈願の後に発信人名が来て、それに続いて安穩の報告、王への挨拶というこれまでとは異なる順番になっているのが特徴である。呼び出された神々は、アッシリア、バビロニアそれぞれの最高神、太陽神、月神、戦争神というふうに帝国全体に関わる神々である。西方からの書簡では、月神シンとその配偶神ニッカルへの祈願が目立つ⁽²⁹⁾。その外には、数は少ないが天候神アダドとブルへの祈願もある。

新アッシリア帝国の首都ニネヴェ出土の3,500程の書簡のうち、宮廷に仕える「科学的」助言者たちからアッシリアの王たちへ宛られた新アッシリア語の全書簡345通が出版されている⁽³⁰⁾。この書簡集は前述のサルゴン二世時代よりは多少広範な時代からの書簡を含むが、

宛名書き様式や神々への祝福祈願には取り立てて目新しい特徴はなく、全てが固定化、様式化されている。とは言え、この時代までに実に多くの定式化された表現が完成し、公式書簡の中で時にふんだんに使用される場合も存在する。一切の個人的感情を差し挟まない官僚たちの機械的報告書にも拘わらず、定式化された表現の組み合わせはそれなりに個性が発揮されているという印象を受ける。多くの神々への祈願を含む書簡がない訳ではないが、圧倒的多数が(神)ナブゥ(と) (神)マルドゥクへの祝福祈願で埋め尽くされている。(神)ナブゥの愛好は、この神が書記の保護神として崇拝されていたことによるものだろうか。その外では「医師たち」の書簡群では、特に神ニヌルタと女神グラへの祝福祈願が圧倒的に多いことがわずかに目立つ現象と言えよう。⁽³¹⁾

これまで見てきたスメル語から新アッシリア時代のアッカド語までの書簡は全て公式書簡であった。発見の場所が宮廷址ないし宮廷書庫という条件から当然のことながら私的書簡は極めて僅かである。1981年出版の Fales の論文によれば、それまで発見されていた⁽³²⁾ 2,300通の書簡の内、僅かに32通が私的書簡に分類されている。アッカド語の私的書簡の分析により、様式化、定式化された公式書簡には見られない当時の話し言葉が判明する可能性があり、これらの研究の重要性が指摘されているが、この論文ではこの問題には立ち入る余裕はないので、将来の課題として残しておきたい。⁽³³⁾

3、メソポタミアの伝統とアラム語書簡との比較

これまで見てきたメソポタミアの書記法と書簡文学を含めた文化的伝統は、新アッシリア、新バビロニア帝国に取って替わって覇権を握ったアケメネス朝ペルシア時代にも継承される。この帝国のユーフラテス川西方における公用語となったアラム語が既に新アッシリア、新バビロニア帝国時代にもアッカド語と共存しながらその文化的伝統を吸収した事実については先に簡略に触れた。したがってペルシア時代のアラム語公用書簡には当然のことながら書簡の形式やそこで使われる語法に前時代の文化的伝統を容易に見ることができる。⁽³⁴⁾

エジプトのアラム語書簡の発信人と受信人の宛名書き様式に関しては Fitzmyer によつて五つの異なる定式の存在が指摘されている。⁽³⁵⁾ それらを具体例によって提示すると、

(1) אֵל אחי פל שי אחוך הושעיה

「我が兄弟ピルタイへ/汝の兄弟ホシャイア」(AP 40:1)

(2) אֵל אחתי רעיה מן אחכי מכבנת

「我が妹ライアへ/汝の兄弟マッキバニトより」(HP 1:1)

(3) מן ארשם על ותפרעמחי

「アルサメスより/ワフプリマヒへ」(AP 26:1)

(4) ארתחשסתא מלך מלכיא לעזרא כתנא ספר דתא די אלה שמיא

「諸王の王アルタクセルクセス/天の神の律法の書記、祭司エズラへ」

(エズラ7:12)

(5) לאתנא בני דרומא

「我らが兄弟、南の住人へ」(Gamaliel 1)

となる。(1)は前置詞(「…へ」)が先行する受信人が先で、発信人(前置詞なし)が続く。(2)は受信人に関しては(1)と同じ、それに発信人を明示する前置詞(「…より」)に伴われた発信人が続く。(3)は発信人、受信人の順で共にそれぞれを明示する前置詞が先行する。(4)は順序は(3)と同じだが、発信人に前置詞が先行しない。(5)は受信人のみでこれに前置詞が先行する。発信人名は書かれていない。(1)の用例が最も多く、公的、私的書簡の両方に現われる。形式的には先に見たニネヴェ出土の様式 *a-na LUGAL be-li-ia ARAD-ka Alu DI-mu* と全く同じである。この様式にアッカド語の影響を認めることにはそれほど問題はないだろう。(2)の用例はヘルモポリス書簡やパドゥア書簡など私的書簡に現われる。発信人を明示する前置詞(𐤀「…より」)の使用はアッカド語の世界では見られなかった⁽³⁶⁾ので、アラム語独自の言表と言えよう。(3)は形式的には(2)の逆順だが、用例は、発信人が高位の者で受信人が下位の者である公的書簡に限定されている。従って時にこの宛名書き様式に続く挨拶が省略される。前置詞𐤀の使用は確かにアラム語独自の言表であって形式的にはこの様式にアッカド語の影響を認める事が出来ない。しかし高位の者が下位の者に先行する表現を選択する精神は、アッシリア、バビロニアの文化的世界と通じていない⁽³⁷⁾と言い切れるだろうか。(4)は前掲の例の外、ダニエル3:31やバル・コシバの書簡という出典からも推察できるように、年代的にもアッカド語の世界から離れている。(5)はオストラコンでスペースの制約もあろうが、それと同時に書簡を運ぶ人間が誰に手渡すかの指示を口頭で受けた場合が前提として考えられる。恐らく受信人も発信人が誰であるかが判る範囲の狭い世界の宛名書き様式であろう。この様式と同じ様式がエジプトの書簡にも発見されるので、単にスペースの問題だけでこの様式を説明することは出来ない⁽³⁸⁾だろう。以上をまとめると、宛名書き様式に関しては、単に語法の類似現象だけから由来や影響関係を云々することは危険だが、歴史的関係をも考慮した時、(1)の定式にアッカド語の影響を承認することは許されよう。それ以外は外部からの影響よりもアラム語独自の定式と見て差し支えないだろう。

次に宛名書き様式に先行する書簡冒頭の神殿挨拶の様式問題に移ろう。これはヘルモポリス書簡やパドゥア書簡の一部だけに使用される極めて独自の表現様式である。

שלם בית נבו (HP 1:1)

שלם בית בנת בסון (HP 2:1,3:1)

שלם בית בחאל ובית מלכת שמיין (HP 5:1)

שלם בית יהו ביב (Padua 1:1)

言及されている神殿はいずれも受信人が住む町にある。ナブゥ神殿(HP 1:1)、バニト神殿(HP 2:1,3:1)、ベテル神殿と天后の神殿(HP 5:1)はアスワンに、ヤフゥ神殿(Padua 1:1)はエレファンティン島にあったことが文献から知られている。発信人と受信人の両者が共通の信仰共同体に所属することが前提となっている挨拶と考えられる。因みにルクソールへ宛られた書簡(HP ## 5-7)にはこの神殿挨拶の様式はない。ルクソールにはアラム人が参詣する神殿がなかったのだろうか。さて、宛名書き様式に先行するこの神殿挨拶の起源、由来をどこに求め、その正確な意味をどのように理解すべきだろうか。⁽³⁹⁾従来、神殿の前に来る שלם (名詞構成体)を祈願、挨拶の意味に取り、例えば「ナブゥ神殿に挨拶を(送ります)」のような訳が与えられ、独立した挨拶文と理解されてきた。そしてこの挨拶に宛名書き様式が続くと考えられた⁽⁴⁰⁾。ところが Fales がこれに異議を唱えた。彼の論点を紹介すると、שלם + 神殿名に相応する挨拶文が存在しないこと、新アッシリア語の書簡では形式上 שלם + 神殿名に相応する表現が存在する(例: DI-mu(šulmu) a-na É.KUR. MEŠ-te)が、しかしそれは挨拶や祈願ではなく、発信人の近くにある神殿が平穩であるという報告文であり、両者の安易な比較も同定も不可能であること、である。Fales の新しい提案は、これまで神殿挨拶として独立して理解されていた表現をそれに続く宛名書き様式と一体化させ、願望の意味に理解することである。例えばヘルモポリス第一書簡の冒頭は次のような構文理解となる。

שלם בית נבו אל אחתי רעיה מן אחכי מכבנת

「ナブゥ神殿の平安が私の妹ライヤアに(あるように/臨むように)あなたの兄弟マッキバニトより。」

大変斬新で魅力的な解釈であるが、いくつか問題点を指摘しておきたい。ヘルモポリス書

簡では一貫して宛名書き様式に⁴¹אל+ןが使われている。したがってヘルモポリス第五書簡から第七書簡までは冒頭に神殿挨拶がないので、全く同じ宛名書き様式が現われてもそこでは願望の意味を込めずに単なる宛名書き様式に理解することになる。やはり⁴¹אל+ןの宛名書き様式は完結したもので、先行する神殿挨拶と一体化するには無理があるように思われる。ただ願望の意味での⁴¹שלם +前置詞+人間の場合、その前置詞はらないし⁴¹עלと共に⁴¹אלも使われているので完全な否定はできない。⁴¹שלם +神殿+前置詞+人間の様式に願望の意味を込めたい場合、アッカド語の連想からは、*lu DI-mu a-na LUGAL be-lía* のように願望表示が可能であり、報告の⁴¹שלם とは区別すべきだろう。このアッカド語の願望表現との並行表現がアラム語には語法の違いとしては現われない。テル・ファカリエ碑文アラム語部分(8-9行目)

לשלם ביתה ושלם זרעה ושלם אנשה

「彼の家の平安のために、そして彼の子孫の平安のために、そして彼の人々の平安のために」

は一見すると、先のアッカド語の願望表現 *lu DI-mu* のようだが、そのアッカド語の並行部分は *SILIM É-šú NUMUN.MES-šú u UKÛ.MEŠ-šú* となっており、*lu* がない。文脈からも不定詞の可能性が指摘されている。結局 Fales の主張は解釈の問題に帰してしまい、⁴²明確な論拠に基くとはいえないのではなかろうか。筆者は、神殿挨拶と宛名書き様式をアッカド語との関連で結び付けるにはやはり無理があるとの結論に達した。むしろ、第十九王朝時代から同時代のデモティック（民衆文字）書簡に至るまで綿々と生き続けた神々への祈願を伴う挨拶言葉との類比、影響関係を探る方が適切ではないだろうか。その外 Fales は、Fitzmeyer のいわゆる二次的挨拶を安否を問う疑問文に理解するよう提案しているが、⁴³これも Fales 自身が認めているようにアラム語に疑問を表示する語法が明示されない以上、結局は解釈の問題になってしまうだろう。⁴⁴

次に Fitzmeyer によって九つの類型に分けられて論じられている祝福ないし幸い祈願の問題に移ろう。⁴⁵この様式は発信者が受信者の肉体的、精神的壮健を神に願う場合と発信者が自らの願望として述べる場合との二通りの表現がある。最初の場合の例は、

שלם מראי אלהיא כלא ישאלו שגיא בכל ערן

「全ての神々が我が主人の平安を常に豊かに幸い給うように。」(BMAP 13:1)

שלם מראן אלה שמיא ישאל שגיא בכל ערן
 ולרחמן ישימנך קדם רריוהוש מלכא ובני ביתא יתיר מן זי כען חר אלף
 וחין איכין ינתן לך
 וחרה ושיר הוי בכל ערן

「天の神が我らが主人の平安を常に豊かに幸い給うように。

そして彼(神)が汝に王ダリウスと宮廷の王子たちの御前で今より千度も好意を置き給うように。

そして彼(神)が汝に長命を給うように。

そして汝が常に幸せで栄えますように。」(AP 30:1-3)

この文章構造やその内容は、新アッシリア、新バビロニアの書簡文学に多くの並行例を見出すことが出来る。上の例では שלם + שאל⁽⁴⁶⁾ がアッカド語の *šulmu ša'ālu* と並行関係を示す。

発信者である人間が主語となる場合は、

שלם וחין שלחת לך (HP 3:5)

שלם וחין שלחת לך ברכתך ליהה ולחנא (Cl-G Ost. 70 A 2-3)

שלם ושררת שגיא הושרת לך (Padua I v 1)

に見られる。ここでも שלם וחין は *šulmu u balātu* というアッカド語の並行表現を見い出せる。又 שרר についても *tūb šērē* という並行表現が存在する。その外、祝福定式に関しても同様に Fales によってアッカド語世界との共通性が説得的に展開されている。これらの定式はエジプトのアラム語書簡、殊に私的書簡に頻出し、それを特徴づける大事な要素となっている。それらが Fales の指摘の通り、アッカド語の世界からの影響を多分に受けているとすれば、公的、私的を問わずエジプトのアラム語書簡全体についても、アッカド語との関係をより重視してよいだろう。

4、結び

今回の検討の結果から一応の結論を引き出すとすれば、エジプトのアラム語書簡の諸様式の検討には、メソポタミアの書簡様式の影響をより真剣に考慮した方が、従来考えられていたエジプト（ないしギリシア）起源、影響を前提にして考えるよりもより良い説明が出来そうだと考えようである。資料も広範に亘り、論じ尽くせなかった主題もあり、今後課題を多く残したが、研究の一里塚としての報告としたい。

最後に旧約聖書の中での書簡に一言触れて置こう。先に言及したダビデがウリヤに持参させた手紙は、書簡の宛名書き、挨拶、などは省略されてその本文の内容だけが引用されていた。従って、書簡形式に関しては、十分なことは何も分からない。しかし、この外にも断片的ではあるが様々な書簡からの引用が旧約聖書の中に散在しており、それらの中には明らかに書簡様式と認められる語法が発見される。又、エズラ記には、比較的まとまったアラム語書簡が何通か引用されている。それらについても将来、古代オリエントの書簡との比較を通してその特質を解明したいと願っている。

注

- (1) 筆者は先に中間報告の中で研究の現状報告を行ったが、本節はその趣旨と多少とも重複することを予めお断わりしておきたい。この部分に関しては、いちいち断ってはいないが Piotr Michalowski, *Letters from Early Mesopotamia*, pp.1-7の序論を参照した。
- (2) 簡単には Michalowski, *Letters from Early Mesopotamia*, #1, pp.11f.に見ることが出来る。
- (3) これはあくまでも書記法を媒体としたコミュニケーションの問題であり、書記法発見以前から口頭による遠隔地間コミュニケーションは行われていたであろう。そして口頭によるコミュニケーションの歴史が書簡に依る新しいコミュニケーションにも様式上大いに影響を及ぼしたであろう事は想像に難くない。しかしこの問題はわれわれの範囲を越えている。
- (4) Thorkild Jacobsen *The Harps That Once...*, pp.275-319.部分訳だが、新しい文献と研究状況を踏まえた W. W. Hallo(ed.), *The Context of Scripture*, pp.547-550をも参照。
- (5) Jacobsen, *The Harps That Once...*, pp.320-344.
- (6) J. S. Cooper, and W. Heimpel, "The Sumerian Sargon Legend," *JAOS* 103,1(1983): 67-82.
- (7) テキストをこのような趣旨に理解しようという提案が、B. Alster, "A Note on the Uriah Letter in the Sumerian Sargon Letter," *ZA* 77(1987): 169-173に述べられている。
- (8) ダビデ時代のイスラエルで、実際どのような書記材料が書簡に採用されていたかについては何も判っていない。ほとんど考えられないがもし粘土板が使用されていたとすれば、メソポタミアのように封筒も考えられる。エジプトのようにパピルスが使用されていたとすれば、折り畳んだパピルス書簡に紐がかけられ、粘土で結び目が覆われその上に封印が押されたことになる。もしオストラコンに書き付けられたとすれば、封印された革袋のような入れ物を使用されたであろう。いずれにしろ、如何にウリヤにその内容を知られることなく書簡を持参させるかの工夫がなされたに違いない。興味深いことに前線のヨアブはダビデに使者を送り、口頭で報告させている（18節）。

- (9) この手紙は (CT54,10)の当該部分が、F. M. Fales, “Assyrian Royal Inscriptions and Neo-Assyrian Letters,” n.9, p.123に引用されている。
- (10) スメル文学史という広い視点からの概観を Hallo, “Toward A History of Sumerian Literature,” pp.181-203に見ることが出来る。スメル語の簡単な歴史については、Marie-Louise Thomsen, *The Sumerian Language*, pp.15-20を参照。
- (11) Hallo, “Individual Prayer in Sumerian: The Continuity of A Tradition,” *JAOS* 88 (1968): 71-89; idem, “The Royal Correspondence of Larsa: I. A Sumerian Prototype for the Prayer of Hezekiah?” pp.209-224を参照。エジプトにも古王国時代以来新王国時代に至るまで、死者や神への書簡が存在する。しかし死後の世界を信じる宗教観に基く人々と現世に執着する世界に生きる人々(ヒゼキヤの詩を見よ!)との精神的乖離は書簡そのものにも大きな相違となって反映している様に思える。両者の比較については将来の研究課題としておきたい。
- (12) アッカド語書簡の研究状況については、前掲 Fales, “Assyrian Royal Inscriptions and Neo-Assyrian Letters,” pp.117-142を参照。
- (13) *ANEP*, ##235,236, and 367. Cf. G.R.Driver, *Semitic Writing* (London,1948): pp.22-23.
- (14) Driver, *Aramaic Documents of the Fifth Century B.C.* (Oxford, 1957); John D.Whitehead, “Early Aramaic Epistolography: The Arsames Correspondence” (Unpublished Dissertation; the University of Chicago, 1974).
- (15) “Aramaic Epistolography: The Hermopolis Letters and Related Material in the Persian Period.” A dissertation submitted to Hebrew Union College-Jewish Institute of Religion (U.M. I #9519177, 1995).
- (16) J. A. Fitzmyer, S. J., “Aramaic Epistolography,” in his *A Wandering Aramean: Collected Aramaic Essays* (Scholars Press, 1979): 183-204; P.E.Dion, “The Aramaic Family Letter and Related Epistolary Forms in Ohter Oriental Languages and in Hellenistic Greek,” *Semeia* 22 (1982): 59-75.
- (17) Fales, “Aramaic Letters and Neo-Assyrian Letters: Philological and Methodological Notes,” *JAOS* 107 (1987): 451-469.
- (18) 影響は勿論一方的ではないが、支配者の言語から被支配者の言語への影響は絶大である。主要な道筋を示した古典的著作として S. A. Kaufman, *The Akkadian Influences on Aramaic*, (Assyriological Studies 19, Chicago, 1974)を掲げる。
- (19) これまで我々が扱っている時代のギリシア語書簡やエジプト語書簡(神官文字、民衆文字、コプト語)は、まとまった形では触れる機会がなかったが、最近になって英語訳の集大成が出版された。Bezalel Porten, *The Elephantine Papyri in English : Three Millennia of Cross-Cultural Continuity and Change* (E. J. Brill, Leiden, 1996).筆者は今回これを十分に使用する時間的余裕はなかったが、それぞれの言語による書簡様式の特徴が容易に概観できるようになったので、今後の課題として取り組みたい。
- (20) 以下、出典については、Michalowski, *Letters from Early Mesopotamia* (Scholars Press, Atlanta, 1993)による。Edmond Sollberger, *The Business and Administrative Correspondence under the Kings of Ur* (TCS 1, J. J. Augustin Publisher, Locust Valley, NY, 1966)をも参照。
- (21) アッカド語の世界での書簡に関する一般論については、A. L. Oppenheim, *Ancient Mesopotamia*, pp.277-280を参照。彼によれば、書簡ないし伝言には二つの様式がある。一つは使者に託された行政命令の様式であり、使者は指示された命令を書簡の受信人に、書かれている通りに(「誰某に言え」)朗唱することが求められている。この種の様式の書簡はスメル時代から新バビロニア時代まで見い出される。高位の者への報告や複雑な行政上の処理

- 理事項には、「斯く誰某 1 は言う、誰某 2 に言え」という第二のわずか僅かばかり異なる様式が使用されている。この様式は全カッサイト時代に使われ、新バビロニア時代の簡潔な様式 *tuppu PN a-na* 「誰某の書簡、…へ」に取って替わられるまで続いた。
- (22) CAD13(1982), s.v.qabû 1f, p.28を参照。
- (23) 上掲 Sollberger, p.2.
- (24) Robert M. Whiting, Jr., *Old Babylonian Letters from Tell Asmar* (Assyriological Studies 22), Chicago, The Oriental Institute of the University of Chicago, 1987.
- (25) Whiting, Jr., pp.4-5.
- (26) 以下 William L. Moran, *The Amarna Letters* を参照。テキストは J.A.Knudtson, *Die El-Amarna-Tafeln, Erster Teil*, Leipzig, J. C. Hinrichs, 1915に拠った。
- (27) Simo Parpola, *The Correspondence of Sargon II, Part I: Letters from Assyria and the West* (State Archives of Assyria, vol.1), Helsinki University Press, 1987.
- (28) この書簡配達人の古代における役割に関する研究については、Samuel A. Meier, *The Messengers in the Ancient Semitic World*. Harvard Semitic Monographs 45 (Atlanta: Scholars Press, 1988) を参照。
- (29) Parpola, *The Correspondence of Sargon II*, ##188ff.
- (30) Parpola, *Letters from Assyrian Scholars to the Kings Esarhaddon and Assurbanipal I. II* (Verlag Butzon & Bercker Kevelaer, Neukirchen-Vluyn, 1970, 1983)
- (31) 神ニヌルタについては、C. Leick, *A Dictionary of Ancient Near Eastern Mythology* (London: Routledge, 1991), s.v. Ninurta-Sumerian god, pp. 135-137, 更に Karel van der Toorn, et al. (eds.), *Dictionary of Deities and Demons in the Bible* (Leiden: E.J.Brill, 1995), s.v. NIMROD, col. 1181-1186, s.v. NISROCH, col. 1186-1190 を参照。元来スメル耕地の神であった神ニヌルタは紀元前 9 世紀には首都カラの主要な神になった。
- (32) Fales, “Assyrian Royal Inscriptions and Neo-Assyrian Letters,” p.118.
- (33) Oppenheim, *Ancient Mesopotamia: Portrait of a Dead Civilization*, p.26.
- (34) 公的書簡として Driver, *Aramaic Documents of the Fifth Century B.C.* (Oxford at the Clarendon Press, 1957) を代表として挙げる。
- (35) Fitzmyer, S. J., “Aramaic Epistolography,” J. L. White (ed.), *Semeia 22, Studies in Ancient Letter Writing* (1982): 31-32. Fitzmyer はそれぞれの様式の出典を挙げているので、それを参照。
- (36) 先に見たスメル語の na-bé-a や na-e-a、アッカド語の *um-ma* や *a-bat* は機能としては発信人の明示の役割を果たしているとは言えアラム語の前置詞とは同列には論じられないだろう。又、先に参照した Wentе, *Letters from Ancient Egypt* や Porten, *The Elephantine Papyri in English* を見る限り、エジプト、ギリシア世界でも発信人を明示する前置詞の使用はただ 1 例 (Wente, #76) を除いては外に認められない。
- (37) Fales, “Aramaic Letters and Neo-Assyrian Letters,” p.455. Fales は (3)、(4)、(5) の定式をアッカド語の世界から分離しようとする。 (4)、(5) はともかく、(3) については疑問を提出しておきたい。
- (38) Wentе, *Letters from Ancient Egypt*, ##177, 188, 191, 217, 223, 235, 241, 247, 249, 252, 258, 273f.
- (39) 前掲 Fitzmyer, “Aramaic Epistolography,” p.60 はその特異性を認めつつも、結論は導き出していない。
- (40) Fales, “Aramaic Letters and Neo-Assyrian Letters,” pp.455f.
- (41) 三種類の前置詞の実例は、簡単には、DNWSI, Part two, s.v. šlm₂ (p.148) に挙げられている。
- (42) Kaufman, “Reflections on the Assyrian-Aramaic Bilingual from Tell Fakhariyeh,” *MAARAV* 3/2(1982): 165f.

- (43) これを一つの可能性として提案しておきたい。第19王朝期の例として Wente, *Letters from Ancient Egypt*, #28、デモティック書簡の例として Porten, *The Elephantine Papyri in English*, C 3 (P.Berlin 13539), C 4 (P.Loeb 1) を指示しておく。
- (44) Fales, “Aramaic Letters and Neo-Assyrian Letters,” p.456.
- (45) Fitzmyer, “Aramaic Epistolography,” pp.34-36.
- (46) 具体例や典拠については Fales, “Aramaic Letters and Neo-Assyrian Letters,” pp.456ff. を参照。

参考文献

- Alster, Bendt, “A Note on the Uriah Letter in the Sumerian Sargon Legend,” *ZA* 77 (1987): 169-173.
- CAD* 13 (1982), s.v. *qabû*, esp. 1f (p.28)
- Contini, Riccardo, “Epistolary Evidence of Address Phenomena in Official and Biblical Aramaic,” Ziony Zevit, S.Gitin, and M. Sokoloff (eds.), *Solving Riddles and Untying Knots: Biblical, Epigraphic, and Semitic Studies in Honor of Jonas C. Greenfield* (Winona Lake, IN., Eisenbrauns, 1995): 57-67.
- Cooper, Jerrold S., and Wolfgang Heimpel, “The Sumerian Sargon Legend,” *JAOS* 103, 1 (1983): 67-82.
- Driver, G. R., *Aramaic Documents of the Fifth Century B.C.* (Oxford at the Clarendon Press, 1957)
- Fales, Frederick Mario, “Assyrian Royal Inscriptions and Neo-Assyrian Letters,” (F.M.Fales, Editor. *Assyrian Royal Inscriptions: New Horizons*. Roma: Istituto per L'Oriente, 1981.), pp.117-142.
- , “Aramaic Letters and Neo-Assyrian Letters: Philological and Methodological Notes,” *JAOS* 107,3 (1987): 451-469.
- Falkowitz, Robert S., “Notes on ‘Lugalbanda and Emmerkar,’” *JAOS* 103,1 (1983): 103-114.
- Grayson, A. Kirk, “Literary Letters from Deities and Diviners: More Fragments,” *JAOS* 103, 1 (1983): 143-148.
- Hallo, William W., and K.Lawson Younger Jr. (eds.), *The Context of Scripture*, Vol. I, Canonical Compositions from the Biblical World (Leiden. Brill, 1997)
- Hallo, William W., “Individual Prayer in Sumerian: The Continuity of A Tradition,” *JAOS* 88 (1968): 71-89.
- , “The Royal Correspondence of Larsa: I. A Sumerian Prototype for the Prayer of Hezekiah?” (B.L.Eichler, et al., Editors. *Kramer Anniversary Volume*. AOAT 25. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1976.), pp.209-224.
- , “Toward A History of Sumerian Literature,” (S.J.Lieberman, Editor. *Sumerological Studies in Honor of Thorkild Jacobsen*. AS 20. Chicago: University of Chicago Press, 1976.), pp.181-203.
- , “Letters, Prayers and Letter-Prayers,” *Proceedings of the Seventh World Congress of Jewish Studies: Studies in the Bible and the Ancient Near East* (Jerusalem, 1981), pp. 17-27.
- Hoftijzer, J., and K. Jongeling, *Dictionary of the North-West Semitic Inscriptions* (E.J.Brill, Leiden, 1995)
- Jacobsen, Thorkild, *The Harps That Once...: Sumerian Poetry in Translation* (New Haven, Yale University Press, 1987)

- Kaufman, Stephen A. "Reflections on the Assyrian-Aramaic Bilingual from Tell Fakhariyeh," *MAARAV* 3/2(1982): 137-175.
- Knudtzon, J. A., *Die El-Amarna-Tafeln* (J.C.Hinrichs, Leipzig, 1915)
- Kraus, F. R., "Einführung in die Briefe in altakkadischer Sprache," *JEOL* 24(1975-76): 74-104.
- Leick, Gwendolyn, *A Dictionary of Ancient Near Eastern Mythology* (Routledge, London, 1991)
- Meier, Samuel A., *The Messenger in the Ancient Semitic World* (Scholars Press, Atlanta, 1988)
- Michalowski, Piotr, *Letters from Early Mesopotamia* (Scholars Press, Atlanta, 1993)
- , s.v. "Königsbriefe," in *RIA* 6(1981), pp.51-59.
- Moran, William L., *The Amarna Letters* (The Johns Hopkins University Press, Baltimore, 1987)
- Naveh, J., "A Hebrew Letter from the Seventh Century B.C.," *IEJ* 10,3(1960): 129-139.
- Oppenheim, A. L., "A Note on the Scribes in Mesopotamia," *Studies in Honor of Benno Landsberger on the Occasion of His Seventy-fifth Birthday* (AS 16; Chicago: University of Chicago, 1965), pp.253-256.
- , *Ancient Mesopotamia: Portrait of a Dead Civilization* (The University of Chicago Press, Chicago, 1964)
- , *Letters from Mesopotamia* (The University of Chicago Press, Chicago, 1967)
- Parpola, Simo, *The Correspondence of Sargon II, Part I: Letters from Assyria and the West* (State Archives of Assyria, vol.1, Helsinki University Press, 1987)
- , *Letters from Assyrian Scholars to the Kings Esarhaddon and Assurbanipal I,II* (Verlag Butzon & Bercker Kevelaer, Neukirchen-Vluyn, 1970,1983)
- Porten, Bezalel, *The Elephantine Papyri in English: Three Millennia of Cross-Cultural Continuity and Change* (E.J.Brill, Leiden, 1996)
- Sollberger, Edmond, *The Business and Administrative Correspondence under the Kings of Ur* (TCS 1, J.J.Augustin Publisher, Locust Valley, NY, 1966)
- Thomsen, Marie-Louise, *The Sumerian Language: An Introduction to Its History and Grammatical Structure* (Copenhagen, Akademisk Forlag, 1984)
- van der Toorn, Karel, et al.(eds.), *Dictionary of Deities and Demons in the Bible* (Leiden:E. J.Brill, 1995)
- Veenhof, K. R., "An Old Akkadian Letter," *JEOL* 24(1975-76): 105-110.
- Waterman, Leroy, "Prefatory Studies," in his *Royal Correspondence of the Assyrian Empire*, Part IV (University of Michigan Press, Ann Arbor, 1936), pp.3-39.
- Wente, Edward, *Letters from Ancient Egypt* (Scholars Press, Atlanta, 1990)
- Westhuizen, Jasper P. van der, "Six Old Akkadian Letters," *ASJ* 11(1989): 277-284.
- , "Seven More Old Akkadian Letters," *ASJ* 12(1990): 261-269.
- Whitehead, John D., "Early Aramaic Epistolography: The Arsames Correspondence" (Unpublished Dissertation; the University of Chicago, 1974).
- Whiting, Robert M. Jr., *Old Babylonian Letters from Tell Asmar* (The Oriental Institute of the University of Chicago, Chicago, 1987)